社会保障領域のインフルエンサーを目指す医療法人東西会グループ

連載131

在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック理事長
橋本 満義(70歳・内科)

「人生を生きる」その言葉通りでしょう。

令和2年7月9日午前9時半ごろ、梅雨前線の大雨による土砂崩れが起こり、伊予市唐川地区の長崎谷集落の14世帯25人が孤立状態となりました。

なんとそれは、当院の看護師が、同日の午前9時ごろ、その地区に住む患者さんであるMさん(80歳、進行がん)のお宅へ伺い、定期訪問看護をしている真っ最中のことだったのです。

Mさんは、総合病院から紹介を受けた「自宅看取り」を希望する在宅患者さんです。規定通り週一回は医師が訪問診療をし、必要であれば往診を行います。普段は、訪問看護師と訪問介護士が対応することで、自宅での安全・安心な療養生活をカバーできています。

今回、私たちは「生活すること」「生きること」「生き延びること」の厳しさと知恵を自然界から教え授けられたような気がします。

そして、私たちの未来は、好むと好まざるとにかかわらず「新型コロナウイルス」と同居しなければならないといった新しい常識の中で生きていかざるを得ません。

当院では、社会保障のうち「広義の在宅医療」を通して、地域の安全・安心オピニオンリーダーとしてその一翼を担い、「範」を示すことを目標としていきたいと考えています。

さて、この災害に巻き込まれた当院の看護師ですが、行政の救命救護班のサポートのおかげもあり、当日無事帰院できました。また、翌日からのその地域への通常在宅訪問業務も何の支障もなく行うことができました。この出来事で、社会保障政策がしっかりしている日本に住み、心優しく思いやりのある愛媛県人であったことが何よりの幸せなんだと思う日々です。

後日、某テレビ局にて、災害現場とその奥で生活する住民、そして病気療養中の患者さんと在宅訪問診療、看護、介護サービスが充実している様子などがつぶさに報道されました。

国策(厚労省管轄)である近い将来の社会保障(「2025年問題」、「保健医療2035年」)を実践するにあたり、大いに参考にするべき課題や問題点を浮き彫りにし、警鐘を鳴らしたのではないでしょうか。

～安全・安心・健康塾～
〈ボランティア活動〉
人の命は、呼吸停止、心停止後5分間で死に至ります。(5分間ルール)
現場の人たちを救命救急士として教育する
「安全・安心・健康塾」出張講義に、期待が集まります。

医療法人 東西会グループ
外来診療(かかりつけ医)内科 要予約
内科・外科・麻酔科・ペインクリニック内科
(医師/葉村 歩)
お医者さんが来てくれる!
24時間・365日体制で対応
(松山市全域)
私たちは、質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数22名
(令和2年6月現在)
末期がん治療(緩和ケア)相談室開設!

(医)東西会イメージキャラクター「イチゴ・ツル・カメ」
三世代の「絆」を表すキャラクターです。
イチゴはこどもたち、ツルはお父さん・お母さん、カメはおじいちゃん・おばあちゃんを表しています。

国立愛媛大学附属病院臨床研究協力機関
大阪医科大学(研修医・医学生)在宅医療研修・研究協力機関
関西医科大学との在宅医療研修・研究協力機関

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
(医)東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9
Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/